〈近代本論第六回：キーワードと年表〉

１．年表

１６０３　徳川家康、征夷大将軍に任ぜられる、江戸幕府開闢（～１８６７）
１６３７　ルネ・デカルト『方法叙説』
１６３７～３８　島原の乱
１６３９　鎖国開始
１６５１　トマス・ホッブズ『リヴァイアサン』
１６６６　荻生徂徠誕生（～１７２８）
１６８５　石田梅岩誕生（～１７４４）
１７０１　赤穂事件。赤穂浪士大石内蔵助一党、吉良上野介屋敷に乱入して主君の仇討ちに成功（忠臣蔵）。
１７１６　徳川吉宗（１６８４～１７５１：将軍在位１７１６～１７４５）第八代将軍位に
１７１６～１７３５頃　享保の改革
１７２４頃　石田梅岩、心学に開悟
１７２９　石田梅岩、自宅に講席を設け、心学講話を始める（梅岩塾）
１７２７頃　荻生徂徠『政談』成立、将軍吉宗への献策書
１７３０　本居宣長誕生（～１８０１）伊勢松坂の木綿仲買商次男
１７３３　杉田玄白誕生（～１８１７）小浜藩（若狭国）下屋敷で藩医の子として生まれる
１７３９　石田梅岩『都鄙問答』
１７７１　杉田玄白ら、腑分けを実見
１７７４　『解体新書』（『ターヘル・アナトミア』和訳）
１７８１　カント『純粋理性批判』
１７８９　フランス革命
１７９５～１８２１　宣長の代表的な随想、『玉勝間』の分冊刊行
１８３５　福沢諭吉誕生（～１９０１）
１８５３　黒船来航
１８６７　大政奉還、幕府の終焉

２．江戸期の正しい理解が、日本近代の正しい理解の前提である

→　近世期に準備される近代的定位

① 個我のアトム化 → 中世的紐帯からの離脱（ルネサンス）
① 個我の合理主義（デカルト） → 立法的自律（カント）
② 合理主義の描く集権の青写真（ホッブズ）
→ ヨーロッパ近世との比較において浮かび上がる江戸的合理主義の脆弱さ
→ ヨーロッパ的近世と江戸的近世の構造的差異が背景に
① アトム化の不徹底（士農工商による人為的集団化）
② 集権の不徹底（集権的封建のハイブリッド性）
③ 儒教の準国教化による合理主義の抑圧 → 専制イデオロギーの確立
④ 農本主義による貨幣経済の抑圧 → 倹約令 ⇔ 刹那的消費
→ しかしそれにもかかわらず、ヨーロッパ的近世と日本的近世には多くの共通点が見られる（特に戦国末期から豊臣政権にかけて）

３．近代的定位のシンタクス的基底 → アトム化された個我
→ これはシンタクスであり、文法であるから普遍的に現象する
→ しかし地域的に偏差する → 地域的近代性の淵源となる
→ 機械情報革命の下部構造変革に照応
→ 手工業の大規模化に伴う分業システムの拡充（マニュファクチュア）
→ 商業資本の充実を制度活用しようとする重商主義の芽生え
→ いずれにせよ、生産様式と貨幣経済は定向的に進化充実していく
→ この基底部の運動はヨーロッパと日本で共通

４．日本的近世（特にその草創期）における、〈独創的才能〉の活躍
→ ルネサンス期の芸術運動に比較可能
→ 茶の湯（千利休）、華道（初代池坊専好＝映画〈花戦さ〉のモデル）、琳派（俵屋宗達、尾形光琳）、俳諧（松尾芭蕉）
→ 中世的定型からの自立、革新
→ しかし日本の場合にはそれが家元や流派に収斂することが早かった
（ここに江戸的停滞の社会エートス的背景を認めることも可能かもしれない）

５．近代的定位の普遍文法
→ 近代的定位の時系列的展開
① アトム的個我の誕生 → 新しい文化共同体の理念構築（人文主義）
② 方法的合理主義（デカルト）
③ 合理的集権国家の青写真（ホッブズ）
④ 個我の自律における内的定位の完成（カント）
→ 定位シンタクスの文法化
→ 時系列の各段階は、内的契機として共時化される（有機体の弁証法）
→ 定位型の規範化 → 普遍性の獲得

６．日本近世的定位（江戸的定位）の共時的多元性

→　アトム的個我の誕生までは根源の運動（ヨーロッパと共通）

→　それ以降の展開は、幕藩体制の人為的停滞によって阻害された

→　そこから江戸固有の定位型が生まれた

→　それらは内的な展開力を欠いたため、横並びに共時化しつつ多元化した

→　しかしその多元性は選択可能性であり、それは人為的身分制を内部から自壊させる社会的ネットワークを形成していった

→　自力で近代化を遂行する底力

７．江戸的多元性の明治的ポリフォニーへの自己展開

→　定位の多元性は、社会的分業の進展、マニュファクチュア生産の拡充に照応

→　それを前期産業社会に結びつけることは、幕藩体制では解体期（天保期）の雄藩重商主義から開始された

→　それは後発資本主義と専制体制の組み合わせを生む（明治的政経）

→　明治的定位のポリフォニーの社会基盤を形成

→　明治的ポリフォニーにおいて、江戸的多元性は通時的な定位の〈楽曲〉となる（モチーフとして有機的に一つの全体に編入される）

８．江戸的多元性の解明は、明治的ポリフォニーの内在的理解にとって本質的である

→　基本枠は幕藩体制の化石的人為性

→　近代的定位の自然な展開を阻害

→　この阻害がそれぞれの定位型にどう反照されているかを検証すること

→　定位型内部のネットワーク形成は、人為的身分制を超越するか（心学、蘭学）、平準化する（儒学、国学）ことが特徴的である

→　つまりその社会性は、基本的に等族的であるか（儒学、国学）、すでに〈四民平等〉的である（心学、蘭学）

→　この社会性の平準化力学において、すべての定位は幕末維新的変革のエネルギー源となっていく（本質的に〈反動的復古〉であった儒学、国学もその例外ではない）

９．幕末維新の変革の前提としての幕藩体制の自壊

→　幕藩体制そのものの社会進化の阻害性を、正しく検証する必要がある

１０．近世の出発点は、ヨーロッパと日本でほぼ等質だった

→　封建制の終焉期に王権が伸張し、等族社会への社会進化が始まる

→　近世的絶対主義（合理的集権）への自然な進展

→　この過程への萌芽が戦国時代末期の集権過程に窺える

① 土地収益の支配は、古代末期の荘園制が地頭支配に変わる頃に原型が現れる（初期封建制）この時点での支配は土地（下地（したじ））の支配が中心であり、収益（上分（じょうぶん））は依然として古代的な利権関係が介入し、錯綜していた。

→ 室町期に入ると守護大名の収益支配が浸透し、この過程は〈一円支配〉として戦国大名に引き継がれた。

→ 戦国大名の土地と収益の一元的支配は、秀吉の太閤検地によって完成する。

→ 幕藩体制もこの一円支配の形式は継承したが、それは統一的支配ではなく、制限つきの分権的支配であった（集権的封建制の自己矛盾）

→ 明治政府の地租税制は、土地の私有権を認め、しかしその土地を基礎とする収益の税制は金納により一元化する。これはある意味でハイブリッドな〈一円支配〉であった（下地の支配権は土地生産性の比例的支配権へと変容する）

② 農本的封建から、重商的集権への趨勢が顕在化した

→ 信長の楽市楽座、国際貿易の開始、貿易都市堺の隆盛、安土桃山時代の開放的国際性等々

③ 重商的集権と国際貿易が融合すれば、資本の本源的蓄積が開始する

→ ヨーロッパではこの過程が遅くとも十六世紀後半には一般化した（したがって日本を訪れた商人や宣教師たちは、すでにこの流れの上に乗っていた）

→ 日本ではこの自然な過程が萌芽状態で抑圧された（江戸鎖国により）

→ ノーマンもこの未発の社会進化が日本の近代化の大きな枷となったと考えている（『日本における近代国家の成立』）この概観は基本的に正しい。

④ 等族社会への進化も、初発的ではあるが始まっていた

→ 堺の商人と信長、秀吉、家康の密接な関係

→ 〈第三身分〉としての租税集団になった可能性

→ 統一運動の幕僚に仏僧、茶人（「茶坊主」）が参加することが定型化していた

→ 絶対主義草創期の定型と重なる（「枢機卿」リシュリュー等）

→ 一向一揆勢力、あるいは本願寺勢力が持続的に拡大すれば、そしてそれがもはや主権勢力によって解体できないほどになれば、それは「聖職者等族」を形成する実力を獲得した可能性が大きい。信長の叡山焼き討ちは、そうした等族の実力を削ぐための先制攻撃的な意味もあったかもしれない。家康も一向一揆にはきわめて強い敵愾心を持っていた。

⑤ こうした自律的な社会進化の運動は、幕藩体制の人為的安定により大きく阻害された。それは分権的集権であるという意味で、集権の運動を自ら停止したものでもあった。

→ 農本主義と貨幣経済の敵視はそのイデオロギー表現である

→　鎖国はそのための論理的必然である
→　幕藩体制とは、その成立時までの社会進化をちょうどその時点で人為的に停止した化石化の体制であった
→　制度的自己選択の必然性が、鎖国を選ばせた
→　士農工商は、農を工商の上に置き、商を最下位とした。その「農本性」と商業貨幣経済の蔑視抑圧に、体制の人為性は如実に顕れている。

１１．幕藩体制の根底に置かれた農本主義
→　貨幣経済の定向的発展が、制度の宿痾となって現象する
→　人為的浪費としての〈参勤交代〉
　→　大名の格式が強制する浪費が、商人の致富の源泉となる皮肉
　→　幕末に廃止されかけ、またすぐ復活した
　→　幕府と諸藩の力関係を反映した事実
→　江戸期の幕府改革は、一部分を除き（享保改革の一部分、田沼意次の賄賂金権政治等）、ほとんどすべてが農本の強化（つまり収穫の増大と年貢の確保）と倹約令の乱発に尽きた

１２．帰農論（徂徠他）の観念性、非現実性
→　現実の士分は、江戸初期には一部を除いて（土佐薩摩の郷氏等）ほとんどが城下町の役人武士となっている。農耕はもちろん完全に忘却している。
　＝　「旅宿の境涯」（徂徠）
→　したがって武士の帰農論はまったく観念的な主張であった
→　しかしそれはイデオロギーとしては定常項であった
→　幕府「瓦解」期にも、帰農のオプションが示される
→　内実は、幕臣としての士分を捨てて、庶人となるという意味にすぎない
　（封建イデオロギー的ユーフェミズム）
→　しかし幕臣であった福沢も、その用語の観念性に疑問を感じていない（引用１）
→　それは〈常禄〉と士分とが、彼においても等置されていたことを意味する
→　同じ方向で、勝海舟のアイロニカルな総括がある（引用２）
　（武士＝俸禄階級＝デラシネ的勤め人）

引用１

〈王政維新のその時に、幕府から幕臣一般に三ヶ条の下問をを発し、第一王臣になるか、第二幕臣になって静岡に行くか、第三帰農して平民になるかと言って来たから、私は無論帰農しますと答えて、その時から大小を捨てて丸腰になってしまい、ソコでこれまで幕府の家来となっているとはいいながら、奥平（※奥平藩。咸臨丸渡米の際に奥平の藩主が名目的な艦長をつとめた、その助手役をした縁）からも扶持米を貰っていたので、幕臣でありながら奥平の藩臣である。然るに今度いよいよ帰農といえば、勿論幕府から物を貰う訳

もないから、同時に奥平家の方から貰っている六人扶持だか八人扶持の米も、御辞退申すと言って返してしまいました。〉（福沢諭吉『福翁自伝』〈一身一家経済の由来〉、２５７ｐ）

引用２

〈武士的気風は日をおうてくずれてくる。これはもとより困ったことには相違ないが、しかしおれはいまさらのようには驚かない。それは封建制度が破れれば、こうなるということは、ちゃんと前からわかっていたのだ。……封建制度が破れて、武士の常禄というものがなくなれば、従って武士気質もだんだん衰えてくるのは当たり前のことさ。その証拠には、今もし彼らに金をくれてやって、昔のごとく気楽なことばかり言われるようにしてさえやれば、きっと武士道もばん回することができるに相違ない。〉（勝海舟、『氷川清話』、２５５ｐ）

１３．江戸期の「武士道」は、すでに観念的なイデオロギーであった

→　〈忠義〉の実践は赤穂事件が最後である

→　エートスとしての武士道は、〈一円支配〉以前の惣領制武士団に見られる〈主従情念〉であった（前野『中世的修羅と死生の弁証法』）

→　それは西ヨーロッパの封建制を支えるエートス的紐帯が、〈オマージュ〉と呼ばれた主従契約によって支えられていたことに照応する（マルク・ブロック『封建社会』）

→　この実体的エートスは、戦国大名が城下町を築き、武士団を初期官僚へと再編した時、形骸化した。それはまず〈主従情念〉を擬制し、ついで〈忠義〉イデオロギーへと転生した

→　このイデオロギー化においてはじめて、〈武士道〉は儒教的君臣観と融合した（〈主従情念〉は現実の社会エートスであった期間は、儒教的影響はほとんど被らなかった。それは真正の日本的封建エートスである）

→　この武士道エートスの忠義イデオロギー化は、封建前期の社会の流動性（成り上がり、下克上の多発）の、封建後期社会における固定化に照応している

→　封建制度の実体は、〈門閥制度〉へと変容する（福沢諭吉）

→　江戸期の武士は著しくデラシネ化された、浮動階層であった

→　人為的階層性は、『葉隠』のニヒリズムに反照する（〈世の中はみなからくり人形芝居〉等）

→　『葉隠』を中心に置く新渡戸の武士道論の限界（三島由紀夫の限界でもある）

→　封建前期のエートスと封建後期のイデオロギーの弁別を行っていない

→　全体の立論が曖昧な印象批評に終始する

→　それ自体が、明治近代の中での江戸期の復古イデオロギー化と連動していた（三島の場合は戦後における、戦前的審美的武士観念への復古）

１４．幕藩体制における集権化の停止は、天領の恒常的限界にはっきりと顕れる

→　豊臣政権の末期には直轄領は２０パーセントを超えた
→　江戸期の天領の最大値は享保年間で、２０パーセント以下。以降は幕末まで減少傾向にあった
→　ブルボン朝のフランスは、大貴族の領地を王領が併呑していくことで絶対王政の基盤が形成された
→　プロイセンにおいても、地主貴族のユンカー層が王権の官僚層となることで集権化の流れを加速した
→　したがって江戸期の集権停止は人為的であることがわかる

１５．集権化の停止は、全体支配の前提となった
→　絶対王政においては、等族の平準化が進み、〈内面の自由〉が保証されていく
→　儒教の準国教化も、集権のコストを代替する、全体支配のイデオロギーとして導入されたと見ることもできる
→　いずれにせよ、現状維持への固執が当初から江戸政権の基調であった

１６．儒教的全体支配の系譜
→　人為的身分制度（幕藩体制）　→　朱子学的忠孝論による補強
→　国体論的専制妄想（家産国家型）　→　修身的忠孝論による補強
→　いずれも内面の支配にまで踏み込むことが特徴的である
→　儒教的修身は前近代における全体支配のイデオロギーだった

１７．人為的身分制の分断　⇔　社会のネットワーク形成力、エートスの主体性
→　横並びの社会組織を自己創出（講組織、伊勢参り、富士信仰、連歌俳諧等々）
→　基底部には民衆の生活と直結した流通、貨幣経済の定向的充実
→　多元的定位の展開（心学、儒学、国学、蘭学）
→　維新幕末の定位ダイナミズムの準備（江戸期全体を通じての地下水脈）
→　幕末維新の活力は奇蹟ではなく、長い間に蓄えられた主体的エネルギーの爆発とみるべきである

１８．江戸的定位における組織性、主体性、合理性、経世感覚
→　主体的ネットワーク形成はすべての定位型に共通する
→　経世献策における主体性は、儒学、蘭学に著しい
→　合理性は蘭学において、近代的定位の自己塑性としての全体的展開を示した（水中花的な全体性の自己回復）

１９．基底部における階級縦断的な相互理解の系譜
→　勝海舟の例（引用３）
→　豪商（渋田利右衛門）と貧窮旗本（勝）との出会い　→　媒介は書物と蘭学
→　同好の士　→　行動的社会ネットワークの形成

→　江戸期の隠れた公共性を形成する定常項
→　幕藩体制が設定した人為的分断と、主体的疎外回復の弁証法

引用３

〈若い時分におれは非常に貧乏で、書物を買う金がなかったから、日本橋と江戸橋との間で、ちょうど今、三菱の倉がある所へ、嘉七という男が小さい書物商を開いていたので、そこへおれはたびたび行って、店先に立ちながら、並べてあるいろいろの書物を読むことにしておった。すると向こうでもおれが貧乏で書物が買えないのだということを察して、いろいろ親切にいってくれた。

ところがそのころ、北海道の商人で渋田利右衛門という男もたびたびこの店へ来ており、嘉七からおれの話を聞いて、「それは感心なお方だ。自分も書物をたいへん好きだが、ともかくも一度会ってみよう」というので、つい嘉七の店で出合った。ところが渋田のいうには、「同じ好みの道だから、この後ご交際を願いたい。私もお屋敷へうかがいますから、あなたも私の旅宿へおいでください」といって、無理に引っぱって行った。〉（同上、『氷川清話』〈渋田利右衛門のこと〉、１７ｐ）

２０．流通、貨幣経済の拡充　→　庶民エートスの構造化
→　元禄期のニヒリズム（すべて金の世の中）
→　農本から見ての貨幣経済はすべて〈奢侈〉だったことと鏡像関係にある
⇔　町人の生活エートスの自己構造化　＝　心学（石田梅岩）の成立普及
→　奢侈でも倹約でもない、近代的経済生活の開始

（第六回キーワード終わり）